

「こんにちは」

そのたった一言を耳にした瞬間、全身の毛という毛が逆立ち、流れる血が沸騰し、思わず飛び上がって両手を掲げたくなった。

大袈裟な表現だとは思わない。ネイティブの日本語を話す人間と会ったのは、実に十年近くぶりだったからだ。「こ、こんにちは」

嬉しさのあまり声は震え、何を言ったらいいかも分からなくなる。目の前の若い日本語話者の女性は、にっこりと人当たりのよさそうな笑みを浮かべた。

「よかった。一人だけ日本人の方がいるって聞いてたので、お会いできて安心しました。やっぱり自分の国の言語を聞くとホッとしますね」

「……私も、です」

私のほうこそ安心した、と言いたかった。十年もいればさすがに慣れはしたが、やはり周りの話している言葉が違ふと、どうしても疎外感はいきれなかった。同郷の人間のことを、これほどまでに心強いと感じたこともなかった。

「ああ、ご挨拶が遅れました。私、ネラといいます。よろしく願います」

ネラさん。なんというか、近代的な名前だ。

「サチエです。こちらこそ、よろしく願います」

「サチエさん。素敵な名前ですね」

「えっ、そ、そうですか……？」

シワシワネーム、という言い方ももう死語だろうか。お婆ちゃんみたいで、あまり好きではない名前だった。

だが、ここでは皆ファーストネームのほうで呼び合うというルールがあるため、名字ではなくこちらを使わざるを得ない。

「ええ。和を感じるいい名前だと思います」

「……あ、ありがとう……ごさいます」

そんなふう言われたのは初めてだった。日本にいたころの友達にすら、名前を褒められたことは一度もない。むしろ、自虐ネタとして重宝していたくらいだ。かつてない理解者ができたような心地さえして、私はいっそう心強く感じた。

「まだ分からないことばかりで、ご迷惑おかけするかもしれないませんが、よければ仲良くしてくださいと嬉しいです」

「いえ、こちらこそ……何かあれば、何でも相談してください」

何でも、というのは言い過ぎたかもしれない。私自身

はこの一般従業員にすぎないし、出来ることなんてたかが知れている。

それでも、ここで初めてできた日本人の同僚に、私にできることであれば何でもしてやりたいと思った。彼女は頬を緩めると、頭を下げて他の人の元へと挨拶回りに向かっていった。

私の仕事は、この工場で食品を作ることだ。

業務内容は日によってまちまちだが、大抵は薄ページ色の立方体を作るため、原料を細かく刻む機械を動かしたり、それを型に詰めたり、出荷のために梱包や冷凍をしたり……といった作業をしている。現地語で「ノウト」のように言うらしいこれは、要は肉と野菜と何かの骨をペースト状にし、立方体にした加工品だ。食感は、ネチツ、とコリツ、の中間のような感触で、煮ても焼いてもけっこう旨い。生は謎の病原菌がついている可能性があるがあるのでお勧めできないが、フリーズドライを嚙るのはなかなかイケる、らしい。ただ、これはモッククロケ人にしかできない芸当かもしれない。

「チョウレイをハジメます」

課長の号令で、従業員が一斉に集められる。といってもさほど統率のとれた感じはなく、特にナヒール人なんかは集まるのもゆっくりだし、課長が話している間もいつもひそひそと仲間たちで何か言い合っている。

「エー、キョウは一テン。キョウから、アタらしいジュウギョウインが、×△※ます」

課長の言葉に続いて皆の前に現れたのは、作業服に身を包んだネラだった。ネラは一礼すると、はきはきした声で挨拶する。

「オハヨウゴザイマス。私はネラです。ニホンジンですが、チョグニメ語もハナせます。よろしくおネガイします」

皆から感心の声と、拍手が寄せられる。私はというと、驚きのあまり声も出せずに何回か手を叩いただけだった。経営陣のチョグニメ人と比べても、ほとんど遜色ないほど流暢なチョグニメ語だった。工場全体を見ても、チョグニメ人を除いてここまでチョグニメ語が話せる人間はそうそう居ないだろう。

せっかく自分と近い存在が現れたと思ったのに、結局は遠い星の人間だったかのように、私は心の内でひっそりと落胆していた。

失意のまま朝礼が終わると、課長から「サチエさん」と声がかかった。何かと身構えたが、よく考えれば想像は容易につくことだった。

「ネラさんに、シゴト、オシえてあげて」

日本人同士のほうが、何かと話しやすいだろうという課長の配慮だろう。先ほどのネラの様子なら私でなくても十分大丈夫そうだが。

「ワかりました」

カタコトのチョグニメ語で返事をしてから、「行きましよう」と日本語でネラに言う。やはり日本語は、肩肘を張る必要がなくていい。これを通じる人間が側にいるというだけで、肩の力が何倍も抜けそうだった。

学歴のことなどは聞いていないが、ネラはきつと頭がいいのだな、と思う。工程通りに作業場を回り、機械や器具の説明をざっとして、今日の仕事を口頭で軽く説明しただけで、もう仕事に取り掛かっている。飲み込みが早いのだ。

今日は、ミンチになった材料を正方形の型に詰める、形成の作業だった。やること自体はさほど難しくはないが、角のほうまで詰めるのを忘れて形が丸つぽくなったり、流れる型に手が追い付かなくなったりと、最初のうちは集中力が要求される。慣れさえすれば、適当に手を動かすだけでもこなせるようになるので、私は好きな作業だ。

「ん……簡単そうに見えて、けっこう難しいですね」

普通は一人でやる作業だが、練習ということで前方にネラ、後方に私が立ち、ネラの詰めたものを私が確認していた。最初のほうは綺麗に詰められているが、段々と流れに置いていかれるように、形が崩れていつている。

「これは、一旦ここに肉を持ってきて……こう」

人によってやり方は異なるのだが、私は一度肉を左端に寄せ、型の流れに逆らうようにずらしていく……という方法を好んでいる。こうすると、入り切らなかった分をちよちよいと詰めるだけで、ちゃんと型に嵌めることができる。

「わ、すごい！ ちよつとやってみてもいいですか」

どうぞ、と台を譲ると、さすがはネラ。数回やっただけで、格段に効率が悪くなっている。

「ネラサン、ジョウズネ」

向かいの台で作業をしていた、ナヒール人の従業員がぎよろつとした目を開いて感心する。

「※△×○%◇~\*¥□」

「……え？」

ネラが発したのは、日本語ともチョグニメ語とも異なる発音形態だった。困惑する私に引き替え、向かいのナヒール人はさらに目をひん剥いて、興奮気味に言う。

「ネラ、ナヒール語、シヤベレル！？」

「えっ!？」

まさか、チョグニメ語に加えてナヒール語まで話せるとは。ネラは照れくさそうにはにかみ、「チョットダケ」とチョグニメ語で言った。しかし、さっきの発音は外人が音だけを真似た言葉ではなく、ナヒール語らしい発音やアクセントを伴った、ほぼ完璧なナヒール語だった。

「スゴイ、ネラ！ モット、ハナシ、シヨ——」

ネラに興味津々のナヒール人は、こちら側に身を乗り出して話し出す……が、気分が高まったことで、手の位置に気を配るのが疎かになっていたらしい。

直後、形成した型が次の工程へ向かうコンベアに、ナヒール人の手は挟まれ、ちぎれて持っていかれてしまう。「……ア」

啞然としてそれを見つめるネラとナヒール人。私は我に返ると、すぐさまコンベアの緊急停止ボタンを押し、ナヒール人の手を回収して捨てる。

「サチエサン、ゴメン」

手首から下がなくなつた右手と左手を合わせ、ナヒール人は申し訳なさそうに言う。

「キを、ツけて。コレ、ナガされたら、イブツ」

そう、もしあのまま手が運ばれていたら、型の中に混入してしまう恐れがあった。砕かれてミンチになつていればまだしも、そのままの手が入つてしまえば、とても商品にはならない。

「ゴメン、ゴメン。マ、コウイウコトモ、アルヨネ」

ナヒール人は楽観的——悪く言えばいい加減——で、反省しているのかいないのか、そう言つて作業に戻る。

右手の先には、既にグジュグジュした膿のようなものができていて、ナヒール人の再生能力の高さを実感する。

「ネラさんも、事故にはくれぐれも気をつけて。製品に

害が出たら困るし、なにより私たちは——再生も分裂も、生まれ直しも、できないんだから」

「違つたら申し訳ないんだけど」

昼休憩の時間、同じ席に座つたネラに、意を決して質問する。ネラは食堂のご飯ではなく、持ち込んだ弁当を食べていた。

「ネラつてさ、宇宙奴隷じゃないよね」

私の言葉を聞いたネラが、ぴたりと動きを止める。

「……バレちゃつたか。もう少し、内緒にするつもりだつただけだ」

ネラはぺろりと舌を出し、悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「隠すつもりなら、もう少し頭角潜めなよ」

奴隷が三カ国語を喋れるわけがないのに、と私は半ば呆れながら言う。

ここで日本語を理解できる人間は、私達二人のみ。母国語で話すだけで、何よりも精度の高い密談ができるというメリットもあった。

「逆に聞くけど。サチエさんは、地球に帰りたとは思わないの」

「……思わない、かな」

私の返答に、ネラは「どうして？」と尋ね、畳みかけ

「チヨグニメ人は、故郷の仇なんだよ。多くの人が殺されたり、サチエさんみたいに奴隷にさせられたりしてんだよ。そんな人たちのために働かされて、いいように使われて、サチエさんはそれで満足なの」

ネラはおそらく、声を荒らげないよう必死に抑えているのがわかった。それでも何人かが、ネラの異常な熱量を察知してちらちらと覗き見てくる。

「奴隷も、別に言うほど悪くはないよ。ここは設備も綺麗だし、社食は美味しいし、給料も高くはないけど生活には困らないし。地球に帰れないってくらいで、大した制約もないし……」

「そういう意味じゃなくて！」

バン、と机を叩く音が食堂に響き、辺りが一斉に静まり返る。

「……あ、ごめ……すみませんシタ」

ネラはチヨグニメ語で謝罪し、私には日本語で謝る。「……ごめんなさい。一旦、お手洗いに行ってきます」

そそくさと離れていくネラを見送りながら、地球か、と私は遠い記憶に思いを馳せる。食堂には、再びざわざわと雑多な活気が戻りつつあった。

\* \* \*

地球がチヨグニメ人に侵略されたのは、さほど昔の話

ではない。私が子どものころ、日本は陥落した。

侵略とはいっても、彼らは知的生命体だ。それも、私たちより高度な。無駄に民間人を殺すような真似はせず、自分たちに刃向かう軍隊やテロリスト等のみを、正当防衛だと言うかのように抹殺した。彼らはあらゆる国の政治のトップに立った後は、何百万人かを奴隷として自国に持ち帰ったくらいで、私たちの生活が劇的に変わったというわけでもなかった。なるべくは地球人の文化を尊重してやりたい、くらいに思っているのだとも聞いた。

その後も数年に一回程度のスパンで、地球上の全人民からランダムに、奴隷として人員が集められた。確か三、四回目のタイミングで、私がそこに選ばれ、今こうして工場での労働にあたっている、というわけだ。

正直なところ、私は知り合いが殺されたというわけでも、非道な仕打ちを受けたというわけでもない。奴隷だって響きこそ悪いが、下手をすれば地球で働くよりもよっぽど良い待遇を受けている。

ありていに言えば——「どっちでもいい」のだ。種族や国としてのプライドなんかより、自分が平穩に、脅かされることなく過ごせることが、何よりも大事だと思っ

てしまう。ネラが何を企んでいて、何のために工場へ来たのか、私には検討もつかなかった。ただ、今の穏やかな生活を脅かさないうてくれれば、それで良いと思っていた。

事件が起きたのは、それから一ヶ月ほどが経ったころだった。

ネラも十分仕事を覚え、一人で持ち場を任せられるようになった。ほぼ誰とでも意思疎通ができる、というのは数多の惑星から奴隷が雇われているこの工場では限りなく強いカードで、ネラは一月の間に一躍人気者となっていた。

そんな折、たまたま私とネラの仕事場が被った。原料を粉々に砕く巨大ミキサーの業務だ。

「ああ、ここで被っちゃったか。思ったより早かったな」私の姿を見るなり、ネラはどこか寂しそうな表情で言った。

「……私と被るの、嫌だった？」

「ううん」

不安になって尋ねた私に、ネラはすぐかぶりを振る。「むしろ待ち望んでた。でも、こんなに早くなくても、良かったのになあって」

早い、と言っている意味が、私には分からなかった。同じ職場にいる以上、遅かれ早かれ仕事が被ることはあるし、一ヶ月というのも特段早いわけでもなかった。

「サチエさんのほうが長いから、きっと知ってるよね。チヨグニメ人の食材に、入れてはいけないもの」

「……海藻、隕石、ホコリ、カビ……他にも色々あるけど」

チヨグニメ人は相当な雑食性で、細かく砕きさえすれば基本的には何でも食べられる。だから、このミキサーに投下する原料は、日によって異なる。その日採れた原料を、何もかもでたらめに混ぜてしまうのが、「ノウト」という食品なのだ。

「うん、それもそうなんだけど。一番大事なものを、忘れてる」

「一番……大事な？」

思い当たる節もなくうんうん唸っていると、ネラは私の目を見て、自らの胸に拳を当てた。

「……あ」

その仕草で、彼女が何を伝えたいのか、ようやく理解した。それを察知したように、ネラは満足げに頷く。

「そう。私たち地球人は、奴等にとって猛毒」

チヨグニメ人は雑食性なので、侵略した異星人を食べることもあった。使えなくなつた従業員がいれば、例えばモックロケ人は丸ごと食べられるので、ミキサーに突っ込んで、原料にしてしまうこともある。ナヒール人の手足だって、あのままの形では気味が悪く異物扱いになるものの、粉々にすればそこらへんの骨や皮と変わらない。

しかし、地球人だけは例外だった。煮ても焼いても、なぜかチヨグニメ人にとって極めて有毒な成分が含まれているらしく、食べることは禁じられていた。異星人だと、宇宙奴隷の他に食料奴隷という、食べるために連れてこられる奴隷もいたらしいが、地球人に限ってはそれが無かった。

「私ね。このミキサーの担当になって、サチエさんと仕事我被ることがあつたら、この計画を実行しようと思つてたんだ」

ネラは台車から原料の入った袋を担ぎ、ミキサーの口のほうへ上つていく。ミキサーの刃は、円に見えるほど高速で回転している。

「お別れは、彼奴らの言葉じゃなくて……日本語で、言いたかつたから」

ミキサーに肉が投下され、みるみるうちに跡形もないミンチ状になっていく。一袋を流し込むと、ネラは唐突に作業服を脱ぎ始めた。

「待つて、ネラ、まさか」

「サチエさん。私はこのために、この工場へ潜入したの」  
一糸まとわぬ姿となったネラは、袋を開封する用の備え付けのハサミで、自らの髪をばつさり切り落とす。

「……他の誰が何と言おうと。私は、私たちの故郷を奪つた、彼奴らのことが許せない」

そう言うのと、ネラは切った髪の毛をゴミ箱に捨てる。  
「髪はミンチにしても、残っちゃうかもしれないからね。異物が混じったことが気付かれちゃう」

ネラは、復讐を果たす気なのだ。

「ノウト」は、チヨグニメ人の多くが好んで食べる、国民食のようなものだった。そんなノウトに猛毒が仕込まれていれば——確かに、チヨグニメ人にとって大打撃となることは間違いない。だが、それはつまり……

「ネラ、故郷のことを思う気持ちは、私にも少しは分かる。でも、そこまでする必要は——」

「私には、ある」

きつぱりと、私の手をはね除けるように、ネラは言い放つた。

「会えて嬉しかった、サチエさん。このことは、できたら内緒にしてほしい。私が浮かべられるから」

「待つて、ネラ——」

「さようなら」

ネラは柔らかな笑顔を浮かべて、屋上から足を踏み外すかのように、ミキサーの中へと飛び込んだ。バキバキバキバキ、と凄まじい音がして、何かが碎かれる。そこを覗き込む勇氣は、私にはなかった。

今なら緊急停止のボタンを押して、ラインを止めることができる。猛毒の入ったノウトが世に出るのを、防ぐ

ことができる。

これが世に出れば、たちまち民間のチョグニメ人たちは被害に遭い、この工場もただでは済まないだろう。最悪、働く場所を失うどころか、罪に問われ星を追放される恐れすらある。いや、追放で済めばいいが、あるいは。

それでも。

それでも、停止ボタンを押す指は、動かなかった。

ネラの覚悟を目の前で見せられて、それをむぎむぎと潰すような真似は、私にはできなかった。その程度の愛郷心は、私にもあったのだと自分でも驚く。

恐る恐るミキサーの中を見ると、いつもより原料が赤く染まって見えた。本来ならもう一袋肉を入れるところだが、野菜の量を多くすることにした。

今の私は、立派に隠蔽に加担している。だが、不思議と罪悪感はなかった。故郷のため、だとかは一ミリも思わないが、ただ彼女の夢の背中を、少しばかり押している——そんな感覚だった。

\* \* \*

数日後。件の地球人入りノウトはスーパーや飲食店等に広く出回り、のべ数万人もの地球人中毒者を出した。当然ながら当工場が原因であると突き詰められ、工場は保健所から無期限の営業停止を言い渡されたという。

私は工場長から直々に呼び出され、死をも覚悟したが、工場長は意気消沈としているものの怒る様子はなく、なんだか拍子抜けしてしまふ。

「サチエさん、私はアナタを※△@っている◇%では、ありませんが」

やはり理解の難しいチョグニメ語混じりで、工場長は私に話しかける。しかし、次の質問は配慮されたのか、平坦な言葉で告げられた。

「アナタは、ネラさんのことについて、ナニかシっていましたか」

あの日からネラの姿が見えないことで、混入した地球人はネラだろうと誰もが結論づけていた。しかし、同時に私以外の誰もが、ネラにそうする理由があったことを知らなかった。不慮の事故だろうと、皆は思っているらしい。まさか、あの人当たりのよく明るい人気者だったネラが、そんな泥臭い復讐を計画していたなんて、誰も疑ってはいないのだろう。

「……いえ」

私は首を振る。ネラのためというよりは、自分のためだ。

結局、私は一生かかっても、ネラのようにはなれないと実感した。自分の身を守るために嘘もつくし、自分の

気持ちだつて誤魔化す。ネラのような、強い人間にはなれない。

「……ソウですか。イエ、スコし、キいたダケです」

工場長はそれ以上何も言わず、私を解放した。もしかすると、工場長だけは何か、察するものがあつたのかもしれない。彼は寂しそうに、窓から外を眺めていた。報道陣が立ち入り禁止のロープを乗り越えん勢いで密集している。

「アタらしいシゴト、ハヤクミつかるといいですね」

「……はい」

事件の影響で、あちこちの企業で地球人が大幅なリストラに遭っていると耳にした。今回のように特攻をかけられたら溜まったものではないだろうから、当然だろう。

これからの私たちが、どうなるのかは分からない。何か別の働き口が見つかるのか、地球へ送り返されるのか、はたまたま不必要な存在として処理されるのか。

そのとき、私はチョグニメ人を恨むのだろうか。平穏な待遇に水を差した、一人の勇敢な地球人を恨むのだろうか。

可能なら、後者ではありたくないと思った。仮初めてはあつても、彼女はこの異星の地において一縷の光をくれた、友人であつただから。